

## 令和 3 年度業務実績に係る全体評価への意見

## 【小山委員】

- 法人の設立目的に照らし、業務により得られた成果が、県民の健康の確保及び増進に寄与している。  
周産期・小児医療分野における高度専門医療や高度な療育サービスの提供や県全体の周産期・小児医療、療育水準の向上を図るといった、県の担うべき、政策医療・療育が確実に実施されている。
- 地方独立行政法人の基本理念である公共性、透明性及び自主性の視点から、適正かつ効率的に業務を実施されたかという観点がある。  
営業費用のうち、医業費用の材料費（薬品費）と児童福祉施設費の材料費（薬品費）が実績ではなく、按分計算であるため、恣意性が入りやすい。  
実績による報告をお願いしたい。
- また、従来セグメント情報として、病院と拓桃館で分けていたが、今は一緒になっている。  
変更した理由を財務諸表に記載したほうが、説明責任を果たせると思われる。  
御検討をよろしくをお願いしたい。

## 【熊谷委員】

- 宮城県内のみならず、東北地方全体のこども医療に貢献するべく、救急受け入れやコロナ感染症受け入れ体制の整備などに取り組み、対応されている点は評価できます。
- 小児医療のスペシャリスト集団として、地域の小児医療をけん引していただき、地域全体の質向上にも貢献していただくことを期待いたします。

## 【郷内委員】

- 多くの評価項目で優れた実績を上げておられることを高く評価いたします。
- 現在、こども病院に求められるのは患者と家族をトータルに入院から退院後の生活、心理的・経済的・社会的問題に直面する人々への支援です。  
高度専門医療の提供は十分な医療資源の配置、人材や施設、機材の整備などで目標の達成に成功していると思われまます。  
職員のモチベーションも高く、病院の機能改善に向けて一丸となって向かっていることが感じ取れる報告書です。  
少子化が本県では全国的にも深刻な状況にあるなか、子どもの数の減少に比べて 受療する人数が減らない背景には 出産をとりまく環境の変化もあるという御指摘を伺い、ますますこども病院の役割に期待いたします。

- 今年度で特筆すべきは、新型コロナウイルス感染症への対応と通常の診療・療育体制の両立ができたことです。現場では多くの困難があったことは容易に予想されますが、非対面の活用など工夫されたことを理解しました。
- 患者の家族にも困難な状況が強いられていた状況です。数量的評価は計画を上回る項目が多く評価しますし、数値では見えない「困難な状況への対応」にも努力されたことを感じております。
- 財務諸表についての意見は経常収支比率、医業収支比率とも中間計画を上回っており、運営状況の安定化を評価いたします。

#### 【小林委員】

- コロナ禍においても、質の高い専門的な医療・療育によく取り組んでいる。学会発表、論文発表も積極的になされており評価に値する。
- 状況が変化する新型コロナ診療に柔軟に対応し総合的に取り組んでいた。
- 非常に高額な遺伝子治療（ゾルゲンスマ）は、プロジェクトチームを発足させ慎重に取り組んだのはすばらしいことである。
- 成人移行は支援チームもでき一部の診療科ではうまくなされるようになってきている。しかし、知的障害を合併した重症心身障害児の移行期支援は非常に難しい状況にある。難しい問題であるが今後も取り組んでほしい。
- 増え続ける発達障害診療におけるこども病院への期待は大きい。今後よく検討してほしい。

#### 【齋藤委員】

- 県立病院として、県民の皆様幅広く新型コロナウイルス感染症、特に小児の感染に関して分かりやすい形で広報しても良かったのではないかと思います。  
あるいは、そういった広報を積極的に行っている、ということをも更にアピールしても良いのかなと思います。  
そういった周知やアピールが、ひいては増収につながっていくのではないかと思います。

#### 【土屋委員長】

- 周産期・小児医療分野における高度な医療療育サービスを提供するという年度計画は、COVID-19パンデミックの中で、よく実現されたと思います。  
COVID-19によりベッドに余裕を持たせた病床稼働が求められ、病床稼働率やショートステイ利用者数に大きな影響を与えたものの、数々の先端医療（ゾルゲンスマによるSMAの治療、心疾患のカテーテル治療、整形外科の骨延長術、胎児診断など）の実現に留まらず、小児専門医療分野での若手医師の教育訓練の場（小児科研修プログラム in Miyagi、心臓血管外科や泌尿器科など）、あるいはまた学校教員や市民に対する啓もう活動（講和「お話しシリーズ」など）等で、確実に前進が見られたことは高く評価されると思います。

また、NICUやPICUは、宮城県の出生数減少やCOVID-19対応をする中で、ほとんど影響を受けずに稼働率が維持できたことは、重症患者が選択的にこども病院に集約されていることを意味しており、周辺の医療機関から頼られる存在に成長していることがわかります。

- 昨年5月から、免疫不全症とSMAの新生児マススクリーニングが開始されました。

SMAの治療薬ゾルゲンスマは億を超える薬価の薬剤です。

今までの医薬材料費の節約という考え方では対応しきれない問題が出現しています。

その治療で確実に一つの命が救えるのであれば、それを何とか実現させる方向で努力すべきだと思います。

対策を考えることが急務です。

#### 【橋本副委員長】

- 長引くコロナ禍において、着実に業務が行われており、職員の努力に敬意を表したい。単年度の評価としては、困難な時期だけに項目によってはなかなかA評価とはなりえないものがあるが、B評価でも十分な成果と言えるものと思われる。
- 財務諸表については、経常収支比率が103.4%と黒字決算としてあるが、収入に約31億円の運営費負担金が含まれていることから、社会通念上は赤字決算である。
- 現在の診療報酬体系では高度の小児医療は元々不採算医療であり、税金から補填するのは当然であろう。しかしながら、それでも赤字決算であることに変わりはなく、病院としては経費削減を怠ってはならず、職員にもこの点を周知しておくべきと考える。